

蛇の尾 La cola de la serpiente

著者：レオナルド・パドゥーラ Leonardo Padura

出版社：トゥスケッツ Tusquets

出版年：2011年

ページ数：185ページ

読者対象：一般

ジャンル：文学・推理小説

レポート作成：宇野和美

概要

中国人街で、首をつった中国人の老人の他殺死体が発見され、その胸にはふしぎな記号が刻まれ、手の指が1本切り取られていた。文学と野球を愛し、毎日ラム酒で景気づける、30代半ばの刑事マリオ・コンデは捜査にのりだす。

キューバ新世代作家として、月刊『すばる』（2004年11月号）で野谷文昭氏によりセネル・パスとともに紹介されたレオナルド・パドゥーラの推理小説、マリオ・コンデシリーズの最新刊。読者をぐっとつかんではなさないテンポのよいストーリーと、そこに鮮やかに浮かび上がる20世紀後半のキューバ社会とそこに生きる人々の日常を特長とする同シリーズは、キューバで刊行されたあと、1990年代から現在までに7作がスペインでも刊行されて人気を博し、文学的にも高く評価されている。5刊目の『アディオス、ヘミングウェイ』（ランダムハウス講談社、2007年）は日本でも翻訳出版された。本作では特に、20世紀前半にキューバにわたった中国人移民たちの苦難の歴史に焦点があてられる。

おもな登場人物

マリオ・コンデ：元刑事。回想される事件当時35歳。

マヌエル・パラシオス（マノロ）：警部補。コンデの同僚。

パトリシア・チオン：コンデに捜査を依頼する女性警官。中国人と黒人の混血の美人。

ペドロ・クアン：首を吊って殺されていた中国人の老人。

フワン・チオン：パトリシアの父で、広東出身の中国人。

フランシスコ・チウ：フワンと昔なじみの中国人。パトリシアの名付け親。

タマラ：コンデが思いをよせる女性

あらすじ

元刑事で現在古書店を営むマリオ・コンデは、中国人のことを考えるうちに、中国人街を舞台とした、15年前のある事件のことを思い出す。

まだ刑事だった1989年のことだった。長身ですばらしいプロポーションの女警官、中国人と黒人の血をひくパトリシア・チオンが、中国人街で起きたある殺人事件の捜査を、休暇中のコンデに頼みにきた。その手のことは中国人街に通じた者にしかできないが、彼女の父の中国人フワン・チオンの協力を得られると言う。コンデは引き受け、すぐさま同僚のマノロことマヌエル・パラシオスとともに捜査にのりだす。

事件とは、中国人の老人ペドロ・クアングが首を吊って殺されていたもの。その胸には円の中の二本の矢に四つのバツ印が入った記号がナイフできざまれ、指が一本切り取られていた。ペドロは1928年、13歳のときにキューバに来た。それ以来、去年はじめてひと月ほど帰国した以外は、中国に戻ったことはないらしい。

コンデはバスで中国人街に向かう。雑然とした町並。ソ連からの石油がとぎれがちなので、しょっちゅう停電が起こる。現場に行ってみると、ペドロはコンデが今まで見た中でも最もやせた中国人だった。その後、パトリシアの父フワンをたずねて捜査への協力を依頼するが、フワンは中国人の問題は中国人が解決するのだと言って渋る。フワンはきちんとスペイン語を発音できるが、普段は強い中国人なまりでしゃべる。何年住もうと、その土地に同化せず、異邦人でありつづける中国人。コンデは、何かフワンが隠している気がしてならない。

コンデが好きなものといえば、本と野球だった。ドゥマ、サルガーリ、ヴェルヌ、トウェイン、そして、ダンテ、マッカラズ、フィッツジェラルド、ドスパソス、カミュ、カフカなど、みな大学予科の図書室でおぼえた。そして野球。刑事になってからも、文学が支えとなってきた。中国人街からの帰り道、距離を置きたがっていたフワンのことを考えながら、今日は酒をまじえず、予科以来の友、ヤセのカルロスと話したいと思うが、顔を見ると決心はすぐさまくずれ、ラム酒をあおる。カルロスは、タマラがイタリアから帰ってきて会いたがっているという、思いがけないニュースを告げる。

翌日、コンデはマノロとともに再びフワンをたずねる。フワンは、18歳のときにキューバに来たことを話しはじ

める。中国では土地のない貧しい暮らしで、やがて両親が洪水で亡くなった。仲のいいこのセバステアンとシエンフエゴス（キューバ）で合流したが、セバステアンは旅費をためてアメリカ行きの船に乗ったまま消息を絶った。後に、アメリカ行きの船に乗った中国人は船室で凍らされ、ホンジュラス沖にすてられたことを知る。1936年にハバナに戻り、アフリカ系のミカエラと知り合い、子どもができ、中国人街の外で暮らすようになったという身の上話。

フワンは、ペドロの胸の記号はサンファンコン（中国起源のキューバの宗教）のものに似ていると言い、二人をフランシスコ・チオに引き合わせる。フランシスコは、フワンの古い友人でパトリシアの名付け親である。フランシスコに、サンファンコンの祭壇に案内されるが、記号は微妙に異なっていた。コンデの上司アントニオ・ランヘルは、麻薬とのかかわりも疑ったが、フランシスコはペドロがコカインと関係していたことを否定する。

フワンはだんだんうちとけてきて、その日昼食をコンデとマノロにふるまいながら、ペドロが賭け事と関係していたこと、一年前中国に発ったとき、うまくいけばキューバには戻らないと言っていたが、戻ってきて、その後何があったかは黙っていたこと、裏切りや背信は中国人にとって死を意味するので、ペドロはそのたぐいのことをしたのではという憶測を語る。フワンは、蛇をつかまえるには蛇の尾を捕まえないといけなく、頭から近づくとかみつかれると言い、道教のたとえ話を語る。

タマラは、コンデが大学予科のころから思いを寄せている女性だった。その後彼女は結婚して息子をもうけたが破綻し、1989年の初めにコンデと再会した。だが、しばらくよい関係が続いたが、その後タマラは双子の妹がいるミラノに発ってしまった。そのタマラが戻ってきて、会いたがっているという。だが、会ってみると、タマラはコンデと一緒にいる気はなかった。コンデは絶望し、バルで親友のカルロスやカンディートと深酒をする。

翌朝、コンデはひどい二日酔いになる。昨夜ラム酒ではなく、オルーホに似た強い酒をしこたま飲んだせいだろう。だが、まじない師のマルシアル・パロナをたずねるため船に乗る。昨夜、例の記号の話をしたところ、カルロスがそれはサンファンコンではなく、コンゴ起源のサンテリア教の記号だと言ったため、サンテリア教のまじない師をたずねることにしたのだ。アフリカから連れてこられた奴隷の子孫マルシアルは、コンデが示した記号を見て、それは確かに自分たちの記号だと言う。帰る道々、この記号は単なるパフォーマンスではないかという疑いをコンデはいだきはじめる。その陰に、別の何かが隠されているのではないか。そこでペドロの部屋に行き、ペドロの孤独を思いながら一人で殺風景な部屋をながめていると、何者かにいきなり背後から頭をなぐられる。ペドロのベッドに倒れ、天井を見上げると、梁からぶらさがっていた黄色い紙が目に入る。中国語の文字が書いてある。

コンデはさっそくフワンのもとにいき、読んでもらう。リン・メイ・タンという名があるが、あとはどういう意味かわからないと言う。その後、コンデは上司のアントニオ・ランヘルに呼ばれ、捜査の進捗状況を報告する。ランヘルは、去年からコカインの大取引が行われているという重大な機密に触れ、それとこの殺人が関係しているのではと示唆する。

だが、ランヘルのところから出るとマノロが待ちかまえていて、昨年の捜査資料から、アルマンシオ・バルデスという中国人の賭博の元締めが昨年逮捕され、もめているときにペドロは国外に出て、アルマンシオが死んだときに戻ってきたことがわかったと告げる。だが、アルマンシオが稼いだ金は見つからない。ペドロはアルマンシオと働いていたので、その金をペドロが持っていて、殺人はそれと関係していたのではと推理する。コンデは、例の黄色い紙は金のありか、墓地の位置を示したものだとはひらめく。フワンと墓地で探すとリン・メイ・タンの墓があり、掘ると宝飾品や金貨が出てくる。コンデは帰宅すると、二日間の捜査のことを思い返し、夢の中で蝶としてひらひらと舞っているときに目覚めた男が、はたして自分は蝶になった夢をみていたのか、それとも今の自分は蝶が見ている夢なのか問い返したという中国の説話を思い出す。

翌朝、起きると、フワンの娘、パトリシアが朝食持参でたずねてくる。パトリシアは、父親フワンと、やはり凍死事件で兄弟を失ったフランシスコが、その後主犯だったギリシア人に復讐したことを語る。

コンデは、元外貨不正取引取り締まり官のコントレーラスをたずね、協力をあおぐ。とうとうナーラという男の名が出る。ナーラのもとをたずね、中国人街でアルマンシオの金のことが話題になっていなかったかたずねる。ナーラはしばらくしぶっていたが、最後に、パンチート・チウというカラテ8段の男の名を告げる。フランシスコ・チウの息子だった。

コンデは、パトリシアにはめられたような苦い気分を味わう。フワンに、犯人はパンチートだったと告げると、フワンは、自分が中国からこちらに向かう旅費をフランシスコが出してくれたことを語る。

マノロとともにペドロの部屋に戻り、残っていた指紋を採取し、パンチートの容疑をかため、逮捕にのりだす。常にナイフを持っているパンチートは、ナイフで応戦してきたが、コンデはパンチートの脚に一発弾を撃ちこんでとりおさえる。人を撃つのは人生で二度目。コンデは気落ちし、パンチートの連行をマノロにまかせ、フワンのもとに向かう。ちょうどフワンが歩いていくのを追いかけるかっこうになるが、なかなかつかまらない。しばらくして

フワンが立ち止まりコンデと言葉をかわす。コンデは、「キューバでも中国でも息子はわからんもんだな」と言おうと思うがやめて、「中国人はアリのように働き者だというわけではないな」とだけ告げる。フワンは自分やフランススコは恥じ入っているが、後悔はしていないと告げる。コンデはバルに入り、ラムを飲みながら、だれにもどうにもならないものがあるものだとひとりごちる。

所感・評価

元刑事で、現在古書店を営むマリオ・コンデを主人公とする推理小説シリーズの7作目にあたる本書は、構成といい、緩急のある筋運びといい、キューバ新世代作家レオナルド・パドゥーラの実力が遺憾なく発揮された作品である。

中でも特筆すべきは、人物の魅力と、物語に描きこまれたキューバ社会の興味深さだろう。この事件当時35歳のコンデは、刑事だが文学と野球を愛し、酒と女の誘惑に弱い。皮肉や冗談がしばしばいりまじってテンポよく進む会話や、酒や女がらみで見せるぶざまなエピソードによって浮かび上がるマリオ・コンデは、とりすまさない人間みがあり、読者の共感を呼んで物語にひきこんでいく力がある。

コンデの交友関係、食や生活ぶりその他には、ハバナ社会の現状がうつしだされ、もちろん経済封鎖の影もある。この刊では特に数名の中国人の登場人物によって、ハバナの社会の一員である、20世紀前半にキューバに渡ってきた中国人移民のたどった道のりが描かれる。中国人街の描写からは、町の匂いまで伝わってきそうだ。

それもそのはず、パドゥーラは「フベントウ・レベルデ紙」の記者をしていた1987年に、中国人街についてのルポを書いたそう。働き口があるというのでキューバにやってきたものの奴隷のように使われ、蔑視と孤独の中、故郷からひきはがされながら中国の伝統を固持している中国人移民の姿に魅せられたと、パドゥーラは後書きに書いている。マリオ・コンデシリーズの最初の2冊、Pasado perfecto(完璧な過去、1991)とVientos de cuaresma (四旬節の風、1993)でも中国人街で物語は展開する。

また、人物描写で必ず出てくる「ネグロ(ブラック)」「ムラート(黒人と白人との混血)」などの言葉や、コンゴを起源とする宗教の描写からは、キューバにおける黒人の存在感が伝わってくる。キューバ社会に深く根差した描写は、キューバを知る作家ならではのものだろう。

本書は、マリオ・コンデシリーズの最初の4巻、いわゆる「四季シリーズ」のあと、1998年に書かれた作品だが、当時は発表されることがなかったものを、加筆して発表した。

キューバでもスペイン語圏全般でも評価を得ている、日本で紹介されてもおかしくない作家の作品であること、純文学の読者だけでなく、ミステリー好きの広い読者もとらえられる作品であることから、翻訳出版をぜひ検討してほしい作品である。なお、翻訳は、キューバのことに通暁している訳者が望ましいだろう。

試訳1) 11ページから13ページ(冒頭)

1

物心ついて、人生についていくつかのことを学んで以来、マリオ・コンデにとって中国人は常に、中国人はこうであるに違いないという姿をしてきた。つまり、目がつりあがり、肝臓が悪いかのような色をした耐久性のある皮膚を持つ連中。人生の有為転変によって、遠い神秘の国から運ばれてきた人々。その国とは、ゆうゆうと流れる川と、制覇しがたい高い峰のあいだにある、よくわからない場所だ。そびえる峰々の雪をのせた頂は空にとけて見えない。竜の伝説が伝わる土地は、賢い宦官や、たいがいのニーズにこたえてみせる難解な哲学者を輩出してきた。中国人、正真正銘の中国人というのは、発達した味覚でないと味わえない極上の料理を考えだせる人間に違いないというのも、やがてわかった。バジル、ショウガ、シナモンを加えてレモン汁で煮込み、グラタン仕立てにしたウズラ。卵、カモミール、オレンジジュースを加えて炒めた豚のかたまりを、ウォクと呼ばれるばかでかいフライパンで、ココナッツオイルをからめてキツネ色に炒めたもの。

しかし、歴史的かつ哲学的かつグルメ的な偏見からできあがった、コンデの限られた見解によれば、中国人というのはまた、アフリカ系や黒人の女性(が、手の届くところにいるときはいつも)にきわめて容易に恋をする、やせ形の温厚な男だった。目をつぶって長い竹のパイプをくゆらし、もちろん口数が少なく、その場で言ってもさしつかえないことだけを、歌うような口蓋音で発音する。彼らがよその国の言葉を話すと、どうしてもそんなふうになってしまうのだ。

そう、そういったすべてが中国人だ。しばし考えこんでから、コンデはそう自分に言い聞かせた。だが、よく考えてみると、そんなふうに分が思い浮かべる人物像は、キューバや西洋で、中国人とはこういうものだと一般に考えられている像とはあまり一致しない。とはいえ、自分の経験から総合的に導きだした中国人像は、コンデには調和がとれ、満足のいくものに思われた。自分にとっておなじみの、牧歌的ともいえるその中国人像が、本物の中国人や、自分が知らない中国人のだれかや、老中国人のフワン・チオンが作った料理を食べるといふ僥倖にめぐまれていない者にとってはもちろん、無意味だったとしても、そんなのは知ったことが。フワン・チオンは、パトリシアの父親である。コンデが中国人の文化構造や心理について、なげなしの知識をはたいて考えこむことになったの

は、ほかでもないこのパトリシアのせいだった。

中国人の本質の定義を考えるうち、1989年のあの午後の記憶がよみがえってきた。コンデはそのころ、しばらく中国人街から足が遠ざかっていたのだが、そのときハバナの古く猥雑な中国人街を再びたずねるはめになった。特別手当でかりだされたのだ。一人の男が殺された。正確に言えば、亡くなったのは中国人だった。

中国人（たとえ死んだ中国人だったとしても）がからむと、いつもことは面倒になるものだが、そのときもこみいっていた。たとえば、ペドロ・クアングという名だとわかったその男は、ハバナの町でよくある、ごく普通のシンプルなやり方で始末されたのではなかった。銃で撃たれたわけでもなければ、刃物を刺されたわけでも、頭を殴られたわけでもない。ましてや、毒殺でも焼死でもない。殺された者の出自に合わせてか、死ぬことより生きることのほうがよほどやっかいな（いつまでもやっかいであろう）国にしてみれば、あまりに奇妙で、あまりに東洋的でこれみよがしな殺人だった。混ざりがたい材料で調理された、エキゾチックともいえる犯罪。あろうことか、胸の皮膚にナイフの先で二本の矢が描かれ、指が一本切りとられていたのだ。

試訳2) 18ページ途中から20ページ途中

「どう、元気、マジョ」マリオ・コンデに話しかけると、いつも使う呼び名でそう呼びかけ、ほおに音高くキスをして、うっとり見つめるコンデをふりきった。

「何の用だ」ようやく息をついてつばをのみこみ、しゃべれるようになるとコンデがたずねた。

「入れてくれないの？」

コンデはようやく反応した。

「あ、いや、すまん、その……」そう言って、通り道をあけた。「さあ、入った、入った。だが、あんまり見るな。ちょうど今日、片付けようと思ってんだ、休みだから」ドギマギしながらも、しゃあしゃあとうそぶいた。

横をとおりすぎ、ほおにキスをしたとき、パトリシアの香りがコンデに贈られた。清潔な肌の、健康な動物の、そして女そのものの匂い。彼女が居間に入って行くのを見ていると、コンデは泣きたくなりさえた……。

「男と女警官が家に二人きりって、よくないわね……」

それにしてもひどい部屋ね」居間の真ん中で立ち止まってそう言うと、パトリシアはふいに振り向いてコンデを見つめた。「私に免じて、ひきうけてほしいことがあるの」

コンデはにやりとした。やってやろうじゃないか。パトリシアが手をとってくれるなら、地獄の果てまでもついていこう。

「どうせ、ろくでもないことだろう…… いったいなんだ？」

「休暇はあとまわしにして、ある事件を担当してくれるなら、今すぐこの部屋をそうじしてあげるわ」

イエスと言えば、思ったよりずっと高くつくのはわかっていたが、コンデのこたえは決まっていた。オフに仕事はいっさいすまいという堅固な決心を思い出しもせず、こたえた。

「どんな事件だって？」

パトリシアはにっこりし、長いこといすに積み上げられたままになっている古い雑誌の山の上にファイルを置き、ポケットをさぐってゴムをとりだした。手ぎわよく波打つ黒い髪をまとめると、こめかみの上でゆわえた。

「ショートパンツと古いTシャツを貸して。掃除しながら話すわ」

パトリシアは、片方の靴のかかとをもう片方のかかとで押さえて靴をぬぎ、はだしになって、ブラウスの上から三番目のボタンをはずした。コンデは脚がふるえ、尿道を潤滑液がしたたるのがわかった。

「マジョったら、ストリップじゃないわよ。服をちょうだい、きれいな」パトリシアに言われ、コンデはようやくはっと我に返った。

二時間後、床は水ぶきされ、部屋はすっかりかたづいていた。マリオ・コンデは、ペドロ・クアングの殺人事件について、わかっているわずかな情報を耳にしていた。なぜパトリシアが自分に頼んできたのかは、わかっていた。彼女によれば、その事件は中国人街を案内してくれる信頼のおけるガイドがいなければとうてい解決できない。そして彼女は、署で聞き込みをした結果、真実に近づく可能性があるのは、彼女の父親であるフワン・チオンと親しいコンデくらいだろうという結論に達したのだ。

「しかも、死んだのは、私の名付け親のフランシスコの知り合いなの。きっとパパも知ってる人よ、違うって言うてるけど」

「ここに来る前、親父さんに会って、おれに協力しろって言ったのか？」

「やだ、マジョ、あなたに会いにこようって決めたときから、ノーとはこたえないのはわかってたわ。……だって、友だちでしょう」

降参させるにはもうひと押しとばかりに、そそる声でパトリシアに頼みこまれ、コンデはメロメロになった。ブリーフもメロメロだ。

台所に座ってもう一杯コーヒーを飲んでいると、パトリシアの裸体を流れ落ちるシャワーの音が聞こえてきた。幸い、二日前にヤセのカルロスの母親、ホセフィーナの洗濯機にシーツやタオルをつっこんだところだったので、パトリシアに清潔でこまじなタオルをさしだすことができた。作業を終えると、こんなにうすよごれたかっこうじゃ仕事に行けないと、彼女が言い出したからだ。

